

棚尾地区まちづくり事業

平成 28 年 9 月 29 日 (木) 19 時～
棚尾公民館 3 階

第 55 回 棚尾の歴史を語る会 次第

1 前回までのテーマに関する参考意見

三栄座、笛の名手『老成三州』、棚尾の駐在所など

2 テーマ：棚尾の歩み 第 1 話 「江戸時代までの棚尾」

説明 (磯貝国雄)

出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

4 次回日程

第 56 回棚尾の歴史を語る会 11 月 17 日 (木) 午後 7 時から

テーマ：棚尾の歩み第 2 話「明治時代前半の棚尾」

棚尾の歴史を語る会 棚尾の歩み 第1話

「江戸時代までの棚尾」

1 要旨

棚尾は9年後の2025年に「棚尾村」の制立から400年を迎える。

《村の歴史》

平安時代の仁寿元年（851）志貴荘の荘司である志貴左衛門藤原周亮がこの土地に居住した。よってこの辺りを古くから志貴荘と言い、現在でも志貴毘沙門天と呼び、志貴町、志貴崎町などの地名が残っている。

その後、鎌倉時代に入り、建久年間（1190～）には地頭である熊谷若狭守直氏の所領であった。

江戸時代に入る前までは、まだ今の矢作川が開削されてなくて、この地方は三河湾に面し集落が点在していた。これら海岸一帯の大浜、高浜、高取、西端、東端、棚尾、鷺塚を広く、幡豆郡の大浜郷と称した。

江戸時代に入り、棚尾は寛永2年（1625）に大浜村から分離し、西尾藩の棚尾村として独立した。その後支配する領主は、幕府直轄領、旗本領、岡崎藩、沼津藩と度々変遷し、菊間藩で明治時代を迎える。

《昔の生活》

江戸時代後半から明治にかけて、棚尾はまれにみる人口の多い活気ある村であった。人々の生活は、農地が少ないため、他地区の農地へ出かける出作りが特色である。従って周りの平七新田、亥ノ新田、中江、前浜新田などの新田開発には中心となって取組んだ。

又、農業と農業の合い間には、塩田、棚尾港での荷役或いは海岸の海草採り、近海漁、アサリや蛤取りなどの漁業で収入を得ていた。又、畑で作った綿を「三河木綿」として出荷する織物産業も盛んで、糸績ぎ、機織りなど女性や子供もよく働き、生活を支えた。

2 支配の沿革

(1) 八柱神社貝塚

碧南市内には遺跡として、縄文時代から平安・鎌倉時代に属すると思われる貝塚・

遺跡が 19 箇所ある。その中の一つに弥生町の八柱神社貝塚があるが、未発掘であり詳細は不明である。

棚尾の土地を掘ると貝殻の混じった層がいたるところで見られる。このことによつて、この地に古くから人が住み、海岸で採った貝を食糧にしていた事が分かる。

(2) 平安時代の棚尾

ア 志貴荘

仁寿元年（851）大和国志貴左衛門藤原周亮が勅を奉じてこの地にきて、志貴荘の荘司となる。^{かねたか}

イ 毘沙門天の創建

仁寿 2 年（852）藤原周亮は毘沙門天を安置して祠堂を建てる。

ウ 八柱神社の創建

仁寿 3 年（853）8 月、藤原周亮は八王子宮を建てる。

エ 安専寺の創建

長和 5 年（1016）2 月 僧源徵は天台止觀寺（後の安専寺）を創建する。

(3) 鎌倉時代

ア 源氏と長田氏

平治の乱（1159）に敗れた源義朝が関東へ逃れる途中、知多郡内海荘司の長田忠致（ただむね）に助けを求めた。忠致は平氏の恩賞をあてにして、義朝殺害を兄の親致（ちかむね）に相談する。親致は源氏に対する不義を説いて反対するが、忠致は浴室内で殺害する。親致は身の危険を感じて、応保 2 年（1162）内海から乳母初音が住む棚尾に移り、隠れ住んだ。その後、義朝の子頼朝が伊豆で挙兵し、平家を破り、源氏に世になる。長田氏は大浜熊野神社や八柱神社の神官を永年にわたって務めるなど、この地域の有力な一族となつた。

イ 熊谷若狭守直氏

鎌倉時代になると諸国に守護・地頭が置かれたが、棚尾には建久年間（1190～）
熊谷若狭守直氏という地頭が住んでいた。このことは歴史書「三河二葉松」に記述されていて、その屋敷跡が上屋敷という地名で残っている。現在の若宮町である。

又、多聞山由緒によるとこの熊谷若狭守直氏は毘沙門天を篤く信仰し、一字を建立し鎮守神として庇護したと言われている。

ウ 源氏の地名

源氏は古くからある地名で、由来には次の二つがある。

① 長田氏と源氏

この地に移り住んだ長田親致は、源氏の浪人と言っていたのでこの地を源氏と言うようになった。

② 源氏の武将熊谷若狭守直氏

地頭の熊谷若狭守直氏が源氏の武将であることに因む。昔、この付近は高台の地形だったので、源氏山と称した。

(4) 室町安土桃山時代

「たなお」の地名の初出

「いんりょう 蔭涼軒日録」長享元年（1487）11月8日の条に「就当院末寺大浜多那和（たなお）之興聖寺（鹿苑院末寺）看坊職事」と見える。当時は大浜村の一部であった。

(5) 江戸時代

ア 棚尾村の制立

江戸時代に入り、寛永2年（1625）に、大浜村から独立。その後支配は以下のように変遷した。

① 寛永2年（1625）大浜村から分離独立。西尾城主本多康俊の領地となる。

② 万治2年（1659）幕府領で鈴木八右衛門代官所となる。

③ 寛文2年（1662）幕府領で鳥山牛之助代官所となる。

④ 元禄3年頃（1690）旗本松平正久と沼田新五郎の相給。

⑤ 元禄14年（1701）旗本松平正久と幕府領の相給。

⑥ 元禄16年（1703）幕府領。

⑦ 享保2年（1717）旗本竹田豊前守忠雄と酒井伊豆守友完と岡崎藩領の三給付。

⑧ 宝暦13年（1763）幕府領、

⑨ 明和7年（1770）岡崎藩領

⑩ 天明2年（1782）駿河国沼津城主水野出羽守領地

⑪ 明治元年（1868）上総国菊間藩管轄

⑫ 明治6年（1873）より愛知県

イ 碧南市域の支配の概要

（ア）明和6年（1769）以前の時代（概要）

初期の万治2年（1659）までは西尾藩の支配領域に組み込まれた村が多い。

その後はすべて幕府領になる

棚尾村は元禄3年（1690）以降、相給の飛び地になるなど変化がはげしい。

享保2年（1717）以後は岡崎藩の支配域に組み込まれる村が多い。

それは、江戸期の碧南市域が、それまでの大浜郷のまとまりを失い、岡崎藩と西尾藩に挟まれて、両者の幕政での地位の変化によって、そのいずれかの支配領域に組み込まれる、分裂した「境界領域」の扱いを受けていたことを示す。

（イ）明和6年（1769）に譜代大名水野氏が大浜陣屋の時代

この時代に、それまで違った領主の支配を受けていた、後の碧南市域の村々（大浜、棚尾、鶯塚、平七、伏見屋新田、伏見屋外新田、前浜新田）はすべてが支配領域に組み込まれた。そして、これらの村々は、沼津水野家の支配方式のもとで、「組合村」をつくり村落間の協同・協力関係を発展させ、連合自治によるまとまりを強めた。

（陣屋期前半）

8代忠友、9代忠成（ただあきら）は二代にわたって勝手掛老中を務め、幕府内で活躍したので、碧南市域の村々は水運を利用して江戸と結びつくなど様々な地域産業を勃興・発展させた。

（陣屋期後半）

ところが、天保5年（1834）忠成の死後は老中でなくなったため、幕府内で冷遇され、水野家の領地の村々に御手伝普請と助郷の重い負担が課せられ、厳しい状況におかれた。

3 新田の開発

（1）碧南市内新田の概況

昔の碧南市は南に突出した半島であった。この半島の東を東浦、西の海を西浦と呼んでいた。当時矢作川は八面山の東を流れ、一色の千間で三河湾に注いでいたが、上流から流れ下る土砂がおびただしく、そのうえ川幅が70～90mほどで、上流地方に雨が降ると被害は少なくなかった。

そこで慶長8年（1603）西尾城主本多康俊は、幕命によって幕府の代官米津清右衛門を奉行として工事を起こし、桜井村の木戸から米津にいたる間に長さ1.3km、幅30mの本流を西南の海に注がせることにした。この工事は慶長9年（1604）に竣工した。

この矢作新川が築かれてから、その勾配が急であったため、矢作川本流の水吐け

はよくなつたが、上流からおびただしい土砂が流れ、十年ほどの内に南の入海をすつかり埋め尽くした。

東浦に続く湿地帯に干拓を試みたのは稻生平七である。彼は明暦元年（1655）本格的な調査・金策にとりかかり、明暦3年（1657）18町3反余の新田が完成した。平七新田と呼ばれる。始め13名で地割、新田の北端に神明社を勧請した。

次に、江戸の商人伏見屋又兵衛は、さきに油ヶ渕沿岸に多くの新田を開いたが、寛文6年（1666）に東浦一帯の砂州を干拓して新田を開いた。その後も元禄時代にかけて少しづつ浅瀬を埋めて新田を開いた。これが伏見屋新田である。

伏見屋新田を水害から守るため、さらにその外側に新田を築くことが考えられ、延享3年（1746）加田屋藤五郎は、伏見屋新田の堤外の州をつきとめて新田を広げていった。これが伏見屋外新田（流作）である。この後この新田の隣に次々に中江などの新田が拡げられていき、寛政3年（1791）伏見屋外新田の内、亥新田が完成了。

この後、矢作川流末をさらに干拓しようという計画が立てられ文政11年（1828）平七村の中根又左衛門、伏見屋新田の藤次郎、大浜村・棚尾村の2村の手によって前浜新田が完成した。この前浜新田は、伏見屋新田が町人の財力によって開かれたのに対して、大浜村、棚尾村の村人の協力により、村の費用を使った村請け新田であったことに注目したい。それには棚尾村の名主斎藤倭助の私財を投じてまでの懸命の努力があったことを忘れてはならない。

斎藤倭助の子孫である藤井達吉は、昭和27年（1952）前浜新田開墾斎藤倭助翁顕彰碑除幕式に招かれ、「まえはまの このひろはまを 開かれし 翁のこゝろの かしこりけり」と讀えた。

(2) 矢作川開削以前の新田開発

新しい矢作川が開削された1605年以前から、入り江の奥や地先の浅いところでの新田開発が記録されている。特に大きなものは、大浜と棚尾の間にあった入海の開墾である。

文禄年間（1592～1595）に棚尾の南から大浜の下山の東まで大堤（おおづみ）が造られている。入り江の北は耕田として利用され、南は塩田となつたと記録されている。旧字名の汐田や塩取場、浜道という地名が棚尾と大浜の間にあったのはこのためと思われる。

4 社寺の歴史

(1) 神社

ア 八柱神社

(ア) 由緒

碧海台地の南端にあたる弥生町 3 丁目に八柱神社が祀られている。江戸時代まで八王子宮と呼ばれていた。創建は仁寿 3 年（853）である。永暦元年（1160）に長田白正が、父の長田親致（ちかむね）と共に知多郡内海から棚尾の源氏に移り住み、八王子宮の神主になった。

明治 5 年（1872）八柱神社と改称し村社に列せられ、明治 17 年（1884）には郷社に昇格する。碧南市内の神社で郷社であったのは、大浜上の宮熊野神社と下の宮熊野大神社の 3 社である。

(イ) 祭神

日本神話の神々で、天照大御神の子である五柱の男神と須佐之男神の子である三柱の姫神の合計八神である。

尚、大正 3 年に若宮社を合祀したので、現在は若宮社の祭神である仁徳天皇も併せてお祀りしている。

(ウ) 沿革を物語る棟札

八柱神社には 26 枚もの棟札が保管されている。棟札がこれだけ残されていことは稀有なことだと言われ、貴重な文化財である。

棟札や現存する構築物などから江戸時代の主な沿革を年代順に並べると次のとおりである。

西暦	和暦	出来事
1620	元和 6 年	工匠民原七右衛門が再建する。
1637	寛永 14 年	工匠藤原朝臣大村喜兵衛が再建する。
1670	寛文 10 年	工匠藤原朝臣宮崎長兵衛が再建する。
1686	貞享 3 年	工匠藤原朝臣青木甚兵衛が再建する。
1742	寛保 2 年	玉垣内石燈籠（最も年代の古い奉納品）
1760	宝暦 10 年	修造
1792	寛政 4 年	再建
1819	文政 2 年	再建拝殿一棟（瓦が残存する）

1822	文政 5 年	手水鉢を奉獻（現在、棚尾神社境内に在り）
1824	文政 7 年	拝殿を再建する。
1827	文政 10 年	斎藤利右衛門が石燈籠を奉獻（社務所の前）
1832	天保 3 年	社殿を再建する。
1839	天保 10 年	山中七左衛門有功が石燈籠を奉獻（拝殿前）
1844	天保 15 年	神樂殿建設（現在の神樂殿鬼瓦に銘が在る）
1846	弘化 3 年	御神殿を再建

(エ) 記録に残る建物の規模

残っている明細帳によると建物の大きさは次のとおりである。

1742 年、1753 年、1762 年、1770 年、1801 年の明細帳：堂 5 尺四方

1841 年の明細帳：本社 9 尺四方、後殿 4 間×2 間 2 尺、社殿 3 間×4 間

(オ) 神楽

現在の神樂殿の鬼瓦には天保 15 年（1844）の銘が刻印されていて、棚尾神樂は古い伝統を受け継いでいることが分る。

イ 琴平社

源氏町 4 丁目に祀られている。加須組の崇敬神社である。祭神は大国主命、崇徳天皇。

社殿前の石燈籠一対と境内東の石燈籠一基には、いずれも文政 7 年（1824）の銘がある。

ウ 秋葉社

八柱神社本殿の北に、防火の神である迦具土神を祀る秋葉社がある。棚尾村史によると元禄 15 年（1702）創建とある。

棚尾は、瓦屋、製塩、酒屋など火を使う産業が栄えたので、火災防止に対する住民の共同意識が強く、その昔より棚尾村において、失火はあれども類焼することがなかったのは信仰心が篤かったといわれている。

尚、平成 22 年（2010）秋葉社再建工事において、解体した本殿の鬼瓦には文政 4 年（1821）の銘が刻印されていた。

エ 二つの秋葉社

妙福寺入り口に大きな秋葉山常夜燈がある。村の火災防止と安全を願って街道に建てられた。岡崎の石工太田藤右衛門淑彦による嘉永元年（1848）の作品で、矢作川下流域に残っている秋葉山常夜燈の中では最大規模のものある。この常夜

燈の下に秋葉社があった。八柱神社の秋葉社を南秋葉社或いは宮地秋葉社と呼び、この妙福寺の秋葉社を北秋葉社或いは妙福寺秋葉社と呼んでいた。

オ 若宮社

若宮町4丁目地内で、以前は南部青年クラブのあった所に若宮社があった。祭神は仁徳天皇。永く榎原家が総代を務めた。大正3年に八柱神社に合祀し、境内の大部分は道路になった。これに因み、若宮町の町名が付けられた。昔はこの道を若宮通りと称し、この坂道を若宮坂と呼んだ。

カ 中山神明社

中山神明社は昔、源氏町に鎮座されていて、生田新左エ門宗義の崇敬する神社であった。元和8年（1622）神靈夢想により、現在地へ遷座する。

キ 春日社

明治3年まで、棚尾小学校内の東南に春日社があった。現在は、妙福寺へ遷る。境内西側に並ぶ祠堂の春日社がそれである。社地は棚尾小学校のプールの位置で、プールが出来る以前は忠魂碑があった。春日社に因み、春日町の町名が設定された。明細帳などの記録によると妙福寺所有地、堂の大きさ：2尺四方、社地：長9間、横6間となっている。

ク 藏王権現

明細帳には、藏王権現の記録が残る。八柱神社南の字田之崎地内、半三郎内にあった。堂は2尺四方であった。

ケ 堀切神明社

平七との境界に神明社があった。大正5年に中山神明社に合祀された。堂2尺5寸四方であった。

(2) 寺院

ア 妙福寺

(ア) 志貴毘沙門天王縁起

棚尾の町は、仁寿2年（852）藤原周亮によって創建された毘沙門天の門前町として栄えてきた。

飛鳥時代に仏法を篤く信仰した聖徳太子は仏教に理解のない物部守屋を討伐の折、祈念していると毘沙門天が形を現し太子に鏑矢を受けた。太子は仏賊を退治することができたので、喜びのあまり自ら彫刻したのがこの尊像である。

これにため妙福寺の毘沙門天は、奈良県志貴山朝護孫子寺、京都鞍馬寺と共に

に日本三体毘沙門天の一体と言われている。

その後平安時代になり、大和の国の志貴左衛門藤原周亮（かねたか）がこの地方の荘園の司となり、この尊像を護持して棚尾に安置し志貴毘沙門天と称した。

(イ) 妙福寺

もとは多聞山吉祥院妙福寺と云う天台宗の寺であった。永禄2年（1559）家康は大浜上の宮、下の宮、称名寺、常行院、林泉寺、妙福寺、清淨院、海徳寺、宝珠寺にそれぞれ土地を寄進する。

永禄3年（1560）に大檀那生田新左衛門忠兼は、法然上人に帰依し、月翁清白上人（天正18年：1590年示寂）を中心開山として招請、浄土宗に改宗し、西山深草派の本山洛陽円福寺（現在京都市新京極誓願寺）の末寺となる。

江戸時代に妙福寺は御朱印地であった。御朱印地とは江戸幕府が寺社に対して朱印状を下布してその所領を確認した土地である。妙福寺の朱印高は19石5斗であった。

ご本尊の阿弥陀如来像は、備後国福山城主水野日向守の家来浅沼作兵衛が貞享年代（1684～1688）に寄進したものである。

其の後、元禄2年（1689）8世良哲和尚の代に別堂を建立し、毘沙門天を安置し、鎮守神としてお祀りした。

(ウ) 碧南市指定文化財

妙福寺堂内に「木造地蔵菩薩半跏像」一軀が祀られている。通称「踏み出し地蔵」という。右手に宝珠を持つ延命地蔵である。

イ 安専寺

(ア) 由緒

平安時代の長和5年（1016）天台座主慈恵大師の直弟源徵^{げんちょう}がこの寺を創建し、天台止觀寺と号した。11世慶鎮は、すべての人々が平等に救われる親鸞聖人の念仏の教えに感銘を受けた。

室町時代の応仁2年（1468）23世祐性（真宗1世）は、三河に下向中の蓮如上人より南無阿弥陀仏の真筆六字名号を賜り、浄土真宗に帰依した。大永6年（1526）26世尊智は證如上人より、一貫代の本尊を賜った。教如上人創建の東本願寺に属し、江戸時代の天和2年（1682）33世尊吟^{そぎん}の代、木仏本尊と龍蓬山安専寺の寺号が本山より御免された。

33世圓説は、安永5年（1776）平坂の鋳物師太田庄兵衛正次に依頼し梵鐘を製作した。平成28年（2016）創建千年の節目の年を迎えた。

（イ）碧南市指定文化財

「蓮如筆六字名号」の軸と安永5年の「梵鐘」が、指定されている。

ウ 光輪寺

（ア）由緒

創建時は天台宗の棚尾総道場であったが、応仁2年（1468）蓮如上人が三河地方巡化のおり、上人より六字の尊号・染筆を賜り浄土真宗に改宗する。

寛文年間（1661～1672）碧海郡吉浜の郷士安藤某、出家得度して休無と号し、当道場を再興。浄土真宗総道場と称し、開基となる。

貞享4年（1687）2世良円木像のご本尊（現在の御内仏の本尊）を安置する。

元禄15年（1702）3世賢了、解脱山光輪寺と改称し、真宗寺院の形を成す。

文政9年（1826）7世玄道、本堂を再建。8世賢立、本堂に合せ本山より現在の御本尊木造阿弥陀如来立像の御下附を受ける。

嘉永3年（1850）釈堅正の寄進により経蔵が建立され、一切経が奉納される。平成4年（1992）本堂が再建された。

（イ）碧南市指定文化財

ご本尊「木造阿弥陀如来立像」一軀。左足を前に出した構成は鎌倉様式が出ている。顔は品格があり快慶の作と称せられる。

（ウ）茶席

光輪寺の茶席は、碧南三茶席の一つである。「藏六庵」と称し、刈谷城主金次郎（仙台より養子）の設計である。山岡鉄舟筆「如亀藏六」の扁額がある。

エ 光照寺（西方寺）

（ア）創建

西方寺は創建時、棚尾にあった。八柱神社の東側に位置して、寺号を光照寺と称していた。このため、この地の昔の地名は光照寺屋敷であった。旧字森之崎の一部であり、現在の町名では弥生町3丁目と若宮町4丁目に位置する。光照寺は当初天台宗の寺院であったが、後、念雅僧都の時、親鸞聖人が関東から京都に帰洛の際、貞永元年頃（1232）岡崎市の柳堂にて聖人の教えを受け、浄土真宗に改宗し、三河三ヶ寺の一つ勝鬘寺（岡崎市）の末寺となつた。

明応 5 年 (1496) 15 世念法のとき棚尾から現在地に移り、寺名を「西方寺」と改めた。

(イ) 弁財天の伝説

光照寺境内の東南部に小さな池があり、弁財天が鎮座されていて弁天池と呼ばれていた。大浜に移る時、この弁財天を佐久島へ譲ったといわれている。

才 専光寺（本伝寺）

棚尾の源氏に天台宗専光寺があった。後の本伝寺で、溪玉の開基である。

正徳年間（1711～16）に大濱の現在地へ移る。このため、字源氏の中には本傳寺屋敷という地名があった

5 産業

(1) 村の人口と産業

村の経済活動の発展は、人口の増減に端的に表れる。そこで、大浜陣屋領になつて以後の棚尾村の人口の推移をみると、支配下に入る以前の天明 2 年 (1782) は 997 人であったのが、天保 12 年 (1841) には 4,733 人と実に 4.75 倍となっている。このような棚尾村の特異な人口増は、どうして可能になったのか考えてみる。

棚尾村は自分の農地を持たない所謂「水呑百姓」が多かったのが特徴である。こうした水呑百姓が、どのように生計を立てたかが、うかがえる記事が、安政 5 年 (1858) 2 月に棚尾村が助郷免除を嘆願した文書にある。ここには、「当村の儀は、人家多く御田地払底に付き、隣村并に御他領へ出作仕り、農業の間漁獵浜稼ぎ等にて渡世仕り」とある。ここから「水呑層」の生計は、村内の小作だけでなく、他村への出作と漁獵と浜稼ぎであったことがわかる。浜稼ぎとは塩浜稼ぎや浜の運搬などの賃労働であろう。また、ここには書かれていらないが、この地域は「三河木綿」の本場で、女性たちは、木綿の糸繰りと機織りで、生計を立てていた史料もあり、女性も十分に支えていたのである。

つまり、棚尾村の急激な人口増は、①商工業の発展 ②他村への出作 ③漁業 ④湊、浜での賃稼ぎ ⑤女性の木綿稼ぎ を背景としているのである。それは水呑百姓が小作だけでなく、こうした賃労働によって収入を得る多様な場が、大浜陣屋時代に、この地域に形成されていたことを示している。

又、天保 12 年の明細帳には次の記載もある。

一 男女共農業合間ニ塩浜稼、并所々海表ニテ藻草取・投網・洲引漁・蛤取渡仕

- 候、女ハ糸績・木綿仕候、
- 一 薪之義ハ所々無之、塩浜薪共尾州知多郡、又ハ当国矢作川上山家、其外所々ヨリ積来リ買入申候
 - 一 田畠肥料ハ干鰯・粕、并所々之海表ニテ藻草取肥仕候

(2) 製塩業

大浜、棚尾には、江戸時代から明治末まで、堀川と堀川から南へ分流していた江川に沿って塩田があった。

製塩業は文禄年間（1592～）に大浜村本郷に塩田をつくり、字竜宮から東の一浜まで溝を掘って海水を引き入れ、製塩を始めたのが始まりであると言われている。

この塩田は寛永元年（1624）に矢作川の氾濫によって埋没したが、同5年（1628）に当時大浜村の名主石川八郎右衛門と久五郎は堀川を開鑿し、塩田の復興させるこの堀川口が後に大浜港として繁栄する。

塩の販路は、矢作川の水運が発達する前は、この通称「山街道」が使われた。馬によって安城、挙母を経て飯田街道を通り、遠く信州方面にまで運ばれたのである。矢作川の川舟が使われるようになってからは水運も利用された。

享和元年（1801）の「棚尾村古地図」をみると、八王子社（今の八柱神社）の西一帯は塩浜である。

寛永10年（1633）の塩田の面積は大浜村9町3反7畝21歩 棚尾4町3反1畝2歩 合計13町6反8畝23歩。天明8年（1788）棚尾村の塩問屋は3戸、塩浜地主34戸、小作46戸とある。

また塩浜年貢はそれぞれ地主により取り立て、これを大浜村に差出していた。塩は商品として重要であり、大量であるから藩政時代にあって、領主にとって大きな収入源であった。

昔の塩の作り方は入浜式といって、砂を敷いた塩田に堀川、江川から海水を入れ、その海水を天日や風で乾燥させた後、塩のしみこんだ砂を搔き集め、その砂にさらに海水を通し、塩分の濃い塩水を作り、それを釜で煮詰め製品にした。

棚尾では、源氏橋から南へ向って、現在の弥生町1丁目及び4丁目に塩田がひろがり、それぞれ源氏釜、西山釜、森下釜と呼ばれていた。明治時代に入ってからであるが、藤井達吉もこの付近を「いつしかも 大浜道を あるき居りぬ 塩田なつかし 麦うれにけり」と詠っている。

(3) 瓦

瓦も古い伝統を持っている。永坂奎兵衛が京都の優れた技術を導入して業を始めたのは天明8年（1788）年である。天保9年（1838）棚尾には瓦師6人が数えられるが、「当所にて焼き立てた瓦は、土性よろしく保方よく、当国並に尾州、勢州、江戸表より度々注文申し越し云々」とその繁昌振りを伝えている。

瓦は棚尾港から小舟で積み出され、江戸などへ送られた。また、瓦師は江戸や信州辺にまで出稼ぎに出ていて、後にその地方へ住み着いて技術を伝えているという。

(4) 鋳物

碧南市における鋳物業の先駆者である、国松十兵衛の製作した作品で、棚尾に關係するものは次の二つである。

ア 妙福寺の梵鐘

延宝6年（1678）寄進 檜那生田新左衛門昆弟四人で、国松十兵衛の作品で最も古いものであるが、戦時供出のため現存しない。

イ 安専寺の喚鐘

天保3年（1832）7代光圀の作である。

(5) 鍛冶

鉄工業のもととなる野鍛冶を、平岩幸七が文化5年（1808）に始めている。

6 村の生活

(1) 明細帳にみる公共施設の様子

ア 高札場（こうさつば）

明細帳に「北四ツ辻 御高札場 野地ニテ御座候」とあり、お上からのお触書などを立てた高札場は現在の光輪寺交差点にあった。

イ 郷蔵（ごうくら）

村で共同して凶作に備えるため、糲米を備蓄した蔵である。1742年～1770年の明細帳では場所：亀ヶ上3間×2間半、山伏塚2間半×2間の2ヶ所に在り、1801年～1841年の明細帳では場所：八王子南に10間×2間半が在った。

ウ 棚尾港

明治時代頃まで、堀川の源氏橋付近は棚尾港として栄えた。物揚場で瓦や酒などを積み込んだ舟は堀川を通って、大浜港の沖合いで大きな廻船に積み替え江戸始め、遠くまで運ばれた。又、村に必要な燃料の薪や米などが入って来た。

エ 棚尾橋

大浜村との境界で堀川に架かる橋を、明治時代に今の棚尾橋が架かるまで棚尾橋と呼んだ。棚尾港の中にあって、現在の源氏橋にあたる。構造は板橋で、長さ5間、幅8尺。木杭が1間間隔に横1組3本ずつ打ち込まれ、杭と杭の間に板が厚さ2寸の板が敷かれていた。

(2) 江戸時代の若者

昔は現在と違って、人々は仕事や生活を殆ど村の中だけでしていたので、同じ村の青年たちは仕事や娯楽を共にしていた。その為、若者組が組織されていた。若者組は道普請などの村の労役を分担し、夜警、消防など警防の協同活動も行ったが、最も大きな役割は、祭りや其の他の年中行事に携わることであった。神楽など樂器の演奏は若者組の特権であり、獅子舞などの神事芸能も若者組が中心になって行われていた。燈明の管理も若者組の仕事の一つで常夜燈も若者組によって奉獻されている。

7 地震の記録

碧南市における地震の記録は次のとおりである。

西暦	和暦	地震	備考
715	靈龜元年5月	三河に地震	
745	天平17年	内陸地震	
827	天長4年7月	大地震	
833	天長10年2月	大地震	
855	斎衡2年5月	大地震	
1096	永長元年11月	東海地震	M8級
1497	明応6年	大地震	
1498	明応7年6月	東海地震	明応地震。M8.4
1499	明応8年6月	大地震	
1507	永正4年8月	大地震	
1510	永正7年	大地震	
1586	天正14年1月	大地震	
1589	天正17年	大地震	
1605	慶長10年	東南海地震	慶長地震 M7.9

1632	寛永 9 年	大地震	
1703	元禄 16 年 11 月	地震津波	
1707	宝永 4 年 10 月	東南海地震	M8.4 宝永地震
1710	宝永 7 年 8 月	大地震	
1782	天明 2 年	大地震	
1847	弘化 4 年	善光寺地震	
1854	安政元年 11 月	安政東海地震	M8 級 2 回発生
1861	文久元年 2 月	大地震	